備陽史探訪 NO.8

備陽史探訪の会の誕生から今日まで

会長　神谷和孝

本会が主催している毎月の歴史談話会・特に　平井隆夫氏や藤井高一郎氏を講師として招いて開いた談話会の・湯殿の大広間にあふれんばかりの参加者を目の前にして・ごく自然に・本会が発足して現在に到るまでの経過の一コマ一コマが、私の頭の中を次々に去来して行った。

発足した当時・十名に満たないサークル的な要素を多分に持つ本会ではあったが・会員一人一人が会の将来に対して色々の夢を描いていた。然し・発足して三年目にして・本会がこのような談話会を開くまでの力を持ち・更にこのような多数の参加者が得られようとは・誰しも考えてはいなかったに違いない。

今年度中に五十名の会員をと念願していたけれど・それも今年の半ばで実現可能のきざしが見えてきた。現在会員になっていただいている方のうち・殆ど

<備陽史探訪>（2）

の方は、会の発足の経過や、会の目的を御存知ない方だと思い、今回の会報に、その事にふれてみる事にした。

一、備陽史探訪の会の発足

本会が発足したのは、三年前の事であるが、発足に到るまでの伏線は、それより五、六年前にしかれていた。本会の副会長である田口氏が、高校時代サイクリングで福山市周辺から県北地帯までの古城趾や古墳をめぐるグループ、ユースト、マップ、クラブを結成し、縁あって私が顧問になった時が、備陽史探訪の会が発足した最初の発点と考えている。その時点から、すでに十年近くの才月が過ぎようとしている。

田口氏をはじめ、グループの殆んどのメンバーが、進学、就職で福山を離れ、その間活動が一時ストップしていたが、田口氏が大学を卒業して帰福し、自家業に従事するかたわら、福山に居るメンバーに呼びかけ、再び古城趾、古墳めぐりを始める事になった。約二年間にわたって、メンバーは十人未満の状態が続いたが、まさに本会の揺籃の時期に、二十代の前半の青年で占められるメンバーは

古城趾や古墳めぐりの活動を通じて、何かを学び、何かを作りあげなぼと模索しながらも、情熱をかたむけていたように見える。活動の中から、福山を中心に、その周辺部の歴史の研究にまで輪を広げていこうと云うことで、誰の発案もなく、「備陽史探訪の会」の名称が生まれてきた。

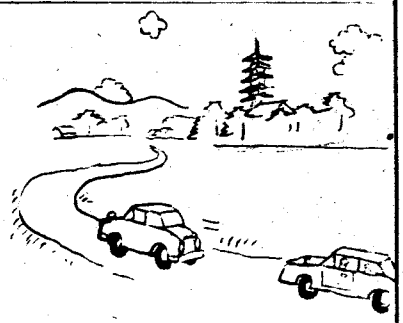
二、会の現状と今後の課題

正式に会の名称も決定したが、その後の二年間は、仲間うちの活動と云っても良い状態だった。然し、その間、会の目的、性格についても、幾度となく厳びしい話し合いが持たれ、そのような話し合いの中で、会員を増やし、活動を拡大していってはと云う会員の気持が熟し、山陽、読売、朝日等の各新聞を通じて、福山市及びその周辺の方々に呼びかけ、四回にわたる談話会及び、臨地見学会を開催して現在に到っている。

行事を重ねる都度、会員が増し、当初の五十人会員の目標まで、後数人と云う現状で、最初の会員は喜びは大きいが、同時に大きな責任を感じている。ここまで輪が広がると前進のみしかないと、むしろ聞きなおりの気持が強い。

会員がふえると、会の運営の方式も変えていかざるを得ない。

本会の目的は、大きく分けて二つある。一つは会員を出来るだけふやして歴史に裏うちされた町づくり、つまり市民運動にまで発展させる事と、もう一つは歴史の探求を続け、福山を中心に、その周辺部の歴史を明らかにしていく事であるが、今後の会の歩む方向は、会員一人一人が、積極的に会の活動に参加されて、自分の会と云う意識で意見を出してもらう中で、決定され、会の目的が実践に移されていくものと確信している。



吉備路をたずねて

種本実

七月十一日九時、あいにくの小雨の中を車二台で吉備路へ出発。九時四十分天拝の本陣着。管理の老婦人に約四千平方メートルの広い敷地を案内していただく。大名の寝室はさすがに天井から畳まで豪華な作りである。例えば金を使った装飾、中国の

〈備陽史探訪〉(5)

風景画・大きな猫の屏風・畳の上のジュウタン等々……。

さらに寝室からの中庭は、殿様の眺める位置からでは木々が重なりあうように創られている。島津の殿様が書いた掛軸や、宿泊する大名の名を書いた板などの証拠品に時代の臭をかぎ、テレビの時代劇でみる大名行列などが頭に浮んだ。さらに倉には、貴重な品々が保存されているそうで、いつまでも重要文化財として保存され、受け継がれてゆくことを祈るばかりである。

本陣を見学した後、規模がやや小さい脇本陣を見学し、十一時三十分、総社市宝福寺へ向かう。十二時着。般若院にて精進料理をいただく。思っていたより質・量が良かった。

三重塔は、雨の中に美しさが映えていた。現在も若年の身を、厳しい修行の日々としている人達がいることを知り、雪舟のことが頭に浮ぶ。私は日常は宗教に関りなく生きているので、修行中の人には申し分ないよこな、それでいて何か大切なものを持っていない自分に寂しさを感じた。

十四時宝福寺を後にし、三十分で国分寺着。元は七重だった塔だが、五重の塔として再建されたのは技術的なものだったのか。色もなく風雨に耐え耐え、どうにか立っているように見える。こうもり塚は、すぐ近くの前方後円墳。周囲の丘々も、何かが埋まっているような気がする。

石室の中はあるべきもの、として石棺があるが、手前に柵があり、近づけない。石棺の主もさぞ写真しているだろう。安らかに眠り続けてほしい。時間の都合で郷土館に寄り、十六時吉備路を後にした。

備陽史探訪の会

昭和51年度事業報告

一月十五日「新年会」於神谷氏宅

会長の奥さんのお手前でお茶を飲みながら、今年にかける夢を語り合う。有意義なひとときを過ごす。（参加九名）

一月三十一日 一月例会「直後山スキーツアー」

たまには過去から離れて 銀世界で遊ぶのも本会の目的である。

この日は関戸氏の手取り足取りの御教示で、スキーが上達した人もいたようである。

例会当番　関戸和典氏

二月十四日　二月例会「木之上城址踏査」

この城址は従来中世山城と言われていたものだが、今回の調査で「古代朝鮮式山城ではないだろうか。」の感を深くし、今会の研究目標として興味深い「夢」を提供してくれた。

例会当番　七森義人氏

井川博之氏

（参加九名）

三月二十一日　三月例会「沼隈半島の手ベット　横倉谷を探る。」

横倉は平家伝説の谷である。赤旗神社等を見学。池の土手に登ればつくしが芽を出し、谷川にはあいるがのんびりと泳ぐ。春のうららかな陽の下、充実した一日であった。尚時間が余ったので、午後、熊野町の一東山城址　常国寺に寄る。

例会当番　神谷和孝氏

（参加九名）

六月十三日　六月例会「竹原の史蹟めぐり」

明治維新の起爆剤「日本外史」の著者頼山陽の故郷竹原。そこには今でもこうし戸に白壁の商家　古い町なみを残している。我々は

<備陽史探訪>(8)

河村氏の入念な説明のもと、小雨の降りしきる中で、古都の雰囲気を満きつした。昼食は土蔵の中の店で食べ、竹原市の起点となった、中世、都宇竹原庄の地頭小早川氏の居城木村城趾、小早川家墓地を見学。帰りは国道を御年代古墳、梅木平古墳で道草を食いながら福山へ。

例会当番　河村修吉氏

（参加八名）

七月十一日　七月例会「吉備路を歩く」

雨にたたられながら、矢掛本陣を見学して宝福寺へ。昼食はここで精進料理に舌つづみを打ち、午後、古代の息吹きを感じる、「吉備風土記の丘」へ。国分寺、こうもり塚を見学。そして雨の中を福山へ。

例会当番　種本実氏

（参加六名）

九月十二日　九月例会「神辺再発見」

新顔もまじえ福塩線で神辺へ、本陣菅波家、菅茶山の廉塾に古い宿場町の面影をしのび、午後バスで国分寺へ。初秋の一日、くたびれながらも有意義な一日であった。

例会当番　田口義之氏

（参加九名）

附記　この日解散前に、旅行

会議を開催。

十月十五日　神谷和孝・田口義之両氏　本会代表として「広島県文化振興会議」（於中央公民館）に出席する。

十月十七日　十月例会「吉備路No.2」

七月に続いての吉備路シリーズ第二弾。中山神社・備中高松城址を見学。新聞を見て参加して下さったA氏の弁説に、全員時を忘れて戦乱の日々を偲んだ。

例会当番　河村修吉氏

（参加七名）

十月二十三日「歴史談話会」準備会議

決定事項　来月十一月より歴史談話会を開催する。（出席五名）

十一月七日・旅行実行委員会を神谷氏宅に於て開催。

十一月十三・十四日「五十七年度備陽史探訪の会一泊旅行」奈良県吉野山へ。

一日目は宿泊した喜蔵院で学習会。二日目に金峰神社　如意輪寺・竹林院　蔵王堂を見学。遠方の会員・新しい会員も参加もあって、楽しい旅行だった。

（参加十六名）

十一月二十七日「第一回歴史談話会」

於中央公民館　午後六時三十分～。

講演「戦国時代の備後国」

田口義之氏

同「国衆について」

備後古城址研究会会長
藤井高一郎氏

（評）
初会ではあったが、会員全員の努力によって成功裏に終った。参加者十七名（内会員七名・入会者三名。）

十二月十一日「第二回歴史談話会」
於中央公民館　午後六時三十分～。
研究発表「瀬戸内の古代山城」
七森義人氏
講演「神辺町の埋蔵文化財とその活用」神辺郷土史研究会菅波哲郎氏

（評）
七森氏の研究発表は、スライドや豊富な資料を駆使してのの、確かな手ごたえのある物であったが、時間の関係上中途で断念したのが惜しまれる。

附記　本日城郭研究部会発足。「山城址」第一巻一号を発刊。

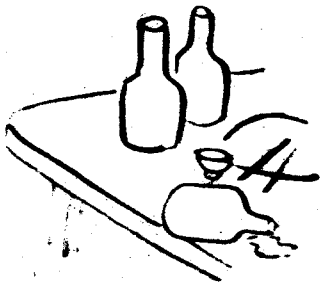
十二月十一日　十二月例会「神辺町追山古墳群の分布調査」
神辺町立歴史民俗資料館の佐藤一夫氏の御指導で、古墳の分布調査を行なう。初めての事でとまどう事も多かったが、参加者の旺盛な探求心に支えられて、一応の成果を挙げる事ができた。
例会当番　田口義之氏
（参加十二名）

コクヨ　コピー51D（32×22）

備陽史探訪の会

十二月十九日「備陽史探訪の会五十七年度納会」於弥助寿司

酒をくみかわし、カラオケで時を過ごしながら、過ぎ去った日々を振り返り、来るべき新たな年の希望を語り合う、楽しいひとときであった。



57年度会計報告

会計　吉田和隆

収入　二万三千円。

一　会費十二人分　二万三千円

（一名は十月入金の為半額となる）

支出　一万五千百円

一　中央公民館使用料（三回）　1700円

一　講師への御礼　2000円

一　葉書往復葉書三十枚つつ　3600円

一　会誌印刷費　2500円

一　会印鑑作製費　2500円

一　山城誌第一号への援助　2100円

一　新聞社への　800円

残金　七千九百三

本年度役員

会長　神谷和孝　会報責任　稙本実

副会長田口義之　「山城志」責　七森義人

会計責吉田和隆

城郭研究部長　楽田英夫

古墳〃　佐藤一夫

わしらは怪しい探険隊

―二月例会レポート―

例会担当　栗田東国

二月二日(日)晴のち雪。テレビでは前日から今日の冬ズ込みを予想していたが、イヤな事は良く当たるらしく全くの御正解。香港―マカオ夜の旅御招待のヤケクソ的寒さであった。わが偏屋史探訪の会は「歴史とは足である。」という老刑事の信念にも似た意地地な考えから実際に歴史現場を踏む例会を月一回行なって来ている。どちらかと言えば「歩けば何とかなる」と言った安易な発想に近いが、これはこれで大事な事なのだ。

とは言え、過去三回にわたる予備調査で全て雨か雪にたたられて来た僕としてはどうも気が重いのだ。「ウチの場合は天候に左右されるからなあ。しかも今回は山の二で喫茶店も何も無いんだもんなあ。」などと言っても仕様のない事をグチりながらとにかく家を出た。

今回の例会が気の重いものである事ここまた理由があった。それは常城に関しての予備調査でその遺跡らしき物がまるで確認できなかった事である。調査に同行した田口君は「まっ、今までその位置が確定されていた常城の跡というのが、どの程度のものか知っておくというのも意味があるんじゃないの。」とおよそ副長らしからぬ無責任な事を言っていたが、そんな意味を求めて寒い中山に登る意味等あるものか。

「見る事と調査する事」といった二元論からの例会の性格付け論争の断片が脳裏を

〈備陽史探訪〉(3)

横ぎり「まっ、いいやいいや。」と世間に対しては
すに構えている内に、福山駅に着いてしまった。
駅には既に神谷先生、田口君、吉田君といった、
多会不動のメンバーと共に、前回の鬼の城の時
参加された阿部さんとその友達の高橋さん、
そして今日初めて新聞の案内を見て来られ
た橋高さん、清水さんといった方々が待ってお
られ、すぐ出発。
近田の駅から井上君が乗り、更に府中で
立石氏、武島氏、小寺氏と合流し、総勢十二名の
記録的大集団となる。何はともあれ喫茶店
というのがウチの会の習性であり、(実際ウチ
の会は喫茶店に入り過ぎる。私達と初めて
参加した神辺の時には、朝昼夕と三回も
入り、少々閉口したものだ。)

ここで自己紹介と今日の説明を行う。
この日の為に作った私の例会資料が配
られる。今までこんな物作った覚えは無
いのだけれど、今回は常 城自体に関する
べき物がないので何とかその辺の不満を
ごまかそうと作ったのだ。内容の貧しさを
文章で糊塗しようというのは、私の最も
得意とするフィニッシュ ホールト 猪木こ
おける延髄斬り長州力におけるスコーピ
オ、デスロック、そしてラッシャー木村におけるア
ヘッドパットであるのだ。この資料のコピ
今日の予定として次の様に定められている。
16時30分 府中を出立し一行は今日の
すばらしい成果に心なごませながら家路
を急ぐのであった。果してこううまくいく
のであろうか。タクシーに乗って山陽に向

から頃にはかなりの雪が降り始めていた。

山頂は案に違わず、うっすらではあるが、雪におおわれていた。新雪に足跡をつけて歩くというのは、かなり楽しい事ではあるのだけれど、それは寒くなったらいつでもコタツにもぐり込めるという条件の下での事であって、この場合我等はそれ程はしゃいだ気分ではあり得なかった。どちらかと言うと、じっとしていると寒いので、という理由でどんどん山に踏み入り、まずは火舎建築跡から調査にかかる事にした。

この建築跡は従来青目寺の東御堂跡とされて来たが、豊元国氏によって常城の附属建築物とされた物であり、その根拠は他の青目寺関係の建物の礎石は全て六尺一間の間隔で据えられてあるのに、この場所のみは十尺一間の幅で礎石が並んでいるという事によるらしい。それでその記述を確かめる為に実測を行なう事にした。

正規の実測法等知りはしないが、まず四周の礎石の間隔を測り、石の中心の外側に立てた棒に碁盤の目の様に水糸を張りそれを紙に写すという方法をとって見た。他愛もない事であるが、こうやって見るといかにも本格的な調査という感じがして結構楽しいものであった。

結果は実測図を以て後に示すが、一二、(三メートル位)間隔というにはかなりバラつきがあり、内側の礎石もかなり水糸からはずれていた。測っては見たものの、これでどういった結論が出る訳でもなかったからこれまで、という唯一の目主商品としては実にあっけない終わり方であった。

ただ礫石の大きさが非常に小さい為、これでは重量物など乗せられまいという感想が出て、平屋、板ぶき屋根の小屋の如き物であったろうという所に落ちついた。

次に山頂から常・金丸方面へ下る陵線に沿って、土塁・石塁をたどる事にしたが、説明している本人がその存在を余り信じていないので迫力の無い事夥しい。参加者の反応も「ウーム。」とか「これかねえ。」とか予想通りであったので、一応見たという事だけで引き返し、五番目の畔で昼食を摂る事にした。

困った事には寒くてゆっくり休憩するという気分になれない為、既にこの時点で午後の分の予定をかなり削減して、こまっており、常城に関して見るべき物はもう残ってはいないのであった。この盛り上がりに欠けたムードの儘タクシーの迎えに来る三時まで無為に過ごす事は、今後の活動の興亡に関わる事に思われた。

そこで急拠、路線を変更し、ちょっと城を探る会という、何処に出しても恥ずかしくない看板は下ろし「常城等ともいいや。焚火を囲んでコーヒーを飲む会」という長い名称に変えたのであるが、この変り身の早さ、したたかさは、当会を何度も滅亡の危機から救ったものである。

枯木を集め火をつける。ヤカンを火にかけカップコーヒーを作るという作業が、無類のテキパキさてもって進行して行く。ヤカンはススて真黒けになってしまったが、「こおいうの炭焼きコーヒーって言うんだぜ。」「あれ高いんだよネ。」と語らぬ冗談が出て来るようになったらもう大丈夫だ。

・焚火は人をして原始の心性に還らしめる。あとは怒濤のラッシングパワアで、強引にフィニッシュに持ち込むだけだ。四国永納山には「ホロノ石」とか「マナイタ石」とかあるそうだが、この山にある「旗立岩」だってかなりなものだ。この事について文句のある奴は前に出て来いという感じで、最後はこの旗立岩を見る事でしめる事にした。

「旗立岩」の存在その物は参加者にとって、圧倒的に無視されてしまったが、この岩から臨める眺望はすばらしい物であった。眼下に松永湾が見通せる。「いつも部屋のなかばかり仕事してるから、こおいう所に来ると本当に生きてるって感じがする?」という女性参加者の感想は私には非常に嬉しくあった。

もっとも今回の例会ではめる所と言えばそれ位しか無かったからかもしれない。帰路突然の提案で青目寺と日吉神社に寄り間なから寄りやっと何ふしら形の石を見る事が出来たのである。

今回の反省点は色々あったが、根本的なそれはあえて回避してやや細かい点についてあげておこう。

「備陽史探訪」(17)

(一) 例会は色々自然的な条件によって左右されるので、予測される事態に対しては細かいアドバイス等(今回では長グツをはいて来た方が良いとか)もあるので、参加予定の方々とは事前に連絡をとりたいものである。特に初参加の人に対しては新聞の案内が充分でないので、一例として備陽史探訪の会の名称で電話帳にのせる等考えてみてはどうか。

(二) 今回立石氏の発案により日吉神社を見学したが、私達はこうしたコースの変更は時間と金の許す限り、大歓迎である。それも出来るならば計画段階で「あそこに行くならついでにここをまわってはどうか」等の形で出される事が望ましい。それによって例会も厚みのあるものとなるし、第一会員相互の間にもっと日常的に世間話が行なわれても良いと思うからである。

(三) 一番重要な教訓は山上では「コーヒー」よりも「汁粉」の方が受けるという事である。最後に寒い中拙い例会に参加して下さった方々に御礼を言いたい。御風邪などめされたのではないかと心配して、ます。これに懲りずにまた御会いてきます様に。

備陽史探訪の会三月の予定

一、三月六日(日) 第五回歴史談話会、矜陽殿
講演「芦田川流域の古墳」
―吉備の中の備南―
神辺歴史民俗資料館 佐藤一夫

一、三月二十二日(日) 三月例会「尾道の古寺を訪ねて」
講師 種本実氏
集合 釣人の像前に午八時半。
費用 千円程度

昭和五十八年二月二十七日 備陽史探訪の会発行

コクヨ ニヒ-25D 44×31

朝鮮式山城模式想像図

倉庫 朝鮮式山城は非常の際地域の全住民が立籠るところなので、米や塩を積む備蓄の倉庫が重要な位置を占める。大野城（福岡県）では60棟以上、基肄城（佐賀県）では30棟以上の倉庫址が、今までに発見され、高安城（大阪府・奈良県）では6棟、鞠智城（熊本県）でも多数の倉庫址がみつかっている

望楼 見張台のこと。楼というからには二階以上の建物が考えられるが、怡土城（福岡県）では計12個の大きな礎石を使っており、もっと大きな建物だったかも知れない。

烽台 昼間は煙を放ち、夜は火を上げる。煙は簡単だが、火はどうしてあげる？ 乾いた草を芯に、乾いた草の周囲に松ヤニを詰んだ火の玉を、チコを利用して 4～5m 位 の高さに打上げる。とぶひ（飛ぶ火）といい 万葉に歌われ、奈良公園には今でもその名が残っている。古代の重要な通信手段。

兵舎や武器庫 もあっただろう。

守護神 毘沙門天などが鎮座として祀られた。大野城など

将台 図の中央にある建物が戦さの指揮をとるところで、果してこのようなものであったか、どうかは まだ分っていない

城門 城山（香川県）では ホロソ石やマナイタ石といわれ、城門の礎石とみられている

土塁 基底幅9m以上、高さ4m以上に土を固め（版築）城壁とする。自然の尾根の外側を切り落して土塁の代りとする鞠智城（熊本県）などの例がある 神籠石式山城の場合は切石を積上げ石垣に近い。ちなみに、勝尾城（佐賀県）ではさらに二重の外側に柵を作ったらしい。

石塁 土の代りに石を積み上げて城壁とする場合がある 屋島城（香川県）の場合がそうである

水門 水口ともよばれ、谷の部分に石垣を積み、一ないし数カ所の水はけ口を作る。大野城（福岡県）では 1.0m にわたって石垣が積まれており、百間石垣と称される。基肄城（佐賀県）の水門は人一人常にくぐり抜けることができ横穴式石室の石の積み方に似ている。

車道、武者走り

犬走り

土塁線より張出させて石を積んでいる。金田城（対馬）など。

〝幻の山城〟発掘に挑む

歴史研究グループ「備陽史探訪の会」

常城、茨城の遺構

特別研究班を編成　資料収集や現地調査

常城の推定地・火吞山を踏査する会員ら

備後にある〝幻の古代山城〟常城（つねき）と茨城（いばらき）の探究を続けている若者らの歴史研究グループが福山にある。「備陽史探訪の会」（会長・神谷和孝近大付福山高教諭、三十九人）がそれ。会内に古代山城部会という特別研究班を編成。備後地方一円の山の調査や資料の収集、分析など精力的に活動している。いつの日か千数百年前の古代山城の大発見というロマンを胸に秘めて―。

古代山城には「朝鮮式山城」と「神籠（こうご）石」という二形態が考えられてきたが、常城、茨城とも朝鮮式山城に入る。この朝鮮式山城は七世紀中ごろ、朝鮮半島からの侵攻に備え百済からの渡来人が指導して山上に築城したもので、防衛の拠点とされたといわれる。対馬の金田城、福岡県の大野城、大阪府の高安城など文献にその名称が出ており有名。岡山県総社市の鬼ノ城も朝鮮式山城として近年、脚光を浴びたが、文献に記されていない山城である。

常城、茨城は八世紀末の官選史書「続日本紀」に「養老三年（七一九年）備後の国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停（とどめ）」とだけ記されてある。山城完成後、不用になって廃止したのか、築城中にやめたのか、取り壊してしまったのかなど全く不明。また、どこに構築されたのかもなぞとされ〝幻〟の山城といわれる。これまでに、府中高教諭だった故豊元国氏が研究・調査を進め、常城については芦品郡新市町の火吞山一帯と推定、一方、茨城は福山市の蔵王山ではないかと推定しているが、万人の認める遺構は見つかっていない。

同会は三年前、発足して以来、火吞山や蔵王山には何度も足を運ぶ一方、他地区のそれらしき山も調査。地域に残る伝承、昔話、史料など研究。また、高安城や鬼ノ城の視察、調査報告書の分析、各地区の歴史同好会と情報交換など活発な調査活動をしている。両推定地以外に古代山城らしき遺構を見つけており、大発見へのあくなき挑戦を続けている。

なお、同会への参加希望者は福山市西深津町一八六三、神谷さん方（電話〇八四九（二三）三九四〇）まで。

ざっくばらん

歴史にロマンを求める備陽史探訪の会会長

神谷和孝さん（43）

今年から積極活動

古墳巡りのOLなど計画

「歴史はみんなのもの。特に備後なら瀬戸内は歴史の宝庫。もっと自分たちの住む町の歴史遺産を知り、その事みを知ってもらいたい」と、歴史好きの若者らと備陽史探訪の会を結成して今年で三年目。「これまでは遺跡などの見学、学習会など同好会的な活動をして来たが、石の上にも三年というように、今年から会員を広く募集するのをはじめ、一般向けの講演会、歴史旅行、親と子の古墳巡りなどエンデーリングなど計画している。

会員は、口コミで増え現在人と四倍にもなった。年齢は高校二年から八十五歳のおじいちゃんまで。職業もサラリーマン、教師、学生、主婦などさまざま。「福山は日本鋼管福山製鉄所の進出で急膨長した"新興都市"。新しい人が多いんです。それだけに私たちは歴史の仲介役としての使命も重いと思っている。当面、会員を五十人に増やすのが目標。将来は数千人もの大団体に発展させ、市民教育の場にしたい。また、歴史に裏打ちされた町づくりに役立ちたい」と夢はでっかい。

神谷さんと歴史の出会いは小学五年のとき。村上正名福山女子短大教授について遺跡や文化財を訪ね歩いた。大学時代（龍谷大史学科）も東洋のポンペイと呼ばれる鞆戸千軒町遺跡や帝釈峡の発掘調査に取り組んだ。現在は近大付福山高で教べん（日本史）をとっている。神谷さんにとり「歴史はまさにロマン」。西深津町一八六三。